

宇宙戦争

2005(平成17)年8月6日鑑賞(梅田ブルク7)

★★★



監督＝スティーブン・スピルバーグ／出演＝トム・クルーズ／ダコタ・ファニング／ジャスティン・チャットウィン／ティム・ロビンス／ミランダ・オットー (UIP 配給／2005年アメリカ映画／117分)

……『スターウォーズ エピソード3』と並ぶ今年夏のハリウッド映画最大の話作。観ておかなければ、という義務感半分で観たが、予想どおり(?)の期待はずれ! とはいっても全然面白くないわけではない。90%が異星人からの逃走劇の物語ながら、それなりに十分な娯楽性を満たす映画であることは認めよう。しかし、所詮それだけ……? また、スピルバーグ監督がこの映画最大の「売り」とする「家族愛」も、所詮は「他者切り捨て」のサバイバルゲームとなっているのでは……? ネタバレは絶対許さない「ヒミツ主義」も結構だが、もっと映画の王道に戻ってほしいと思うのだが……?

異色のパンフレット……?

『キネマ旬報』7月上旬号は『宇宙戦争』を特集していたが、その中でスピルバーグ監督の「秘密主義」を、「今に始まったことではない」と紹介している。その記事によれば、『『宇宙戦争』に出てくる侵略者の姿をトム・クルーズさえ知らない』そうだが……?

この『宇宙戦争』のパンフレットは、明らかに他の映画のパンフレットとは異なるもの。もちろん映画のパンフレットはそれぞれ装丁や内容を工夫しており、また詳しいものや簡単なもの、そして中にはシナリオを収録したものまでいろいろあるが、このパンフレットには何と「ストーリー」の項目がない。ストーリー紹介を極力簡単にしたサスペンスもののパンフレットもあるし、「ネタばれ」に

なるのを防止するためその部分に封をしたパンフレットもあるが、「ストーリー」の項目が全くないパンフレットはちょっと珍しいもの。簡単なイントロダクションの項目の中に、数行だけの人物紹介と大筋の紹介があるだけ。したがって、すべては映画を観てのお楽しみというわけだが、さて……？

原作は？

この映画の原作は、有名な H.G. ウェルズが1898年に発表した SF 小説の名著『宇宙戦争』。パンフレットにある高橋良平氏の「新たなる世界の終わり——H.G. ウェルズの『宇宙戦争』とその後継者たち」の解説によれば、H.G. ウェルズの『宇宙戦争』は『タイム・マシン』『モロー博士の島』『透明人間』に続く第4弾とのこと。『モロー博士の島』を除く他の3作は、私が小学生の時に片っ端から読んでいた図書館の少年少女世界文学全集の中にすべて含まれていたように思う。

そしてその中でも特に『宇宙戦争』は、地球を攻めてくる頭でっかちの3本足（2本足？）のひょろとした火星人というイメージが今でも強く頭の中に残っている。それが『宇宙戦争』そのものだったのか、それともそれを原点に誰かが子供用に書き直したものかわからないが、とにかくイメージは全く同じ。

また『タイム・マシン』にしても、『透明人間』にしても、私が小学生時代の日本すなわち1950年代の日本にどのようにアレンジされていたのかは知らないが、イメージはその時に植えつけられていたもの。

高橋良平氏の解説はきわめて詳細なものだが、私には残念ながらそこまで SF モノを研究しようとする意欲はない……。

なぜか8月6日に……？

この『宇宙戦争』は6月29日に公開され、それなりの評判を呼んでいたが、その1週間後に公開された『スターウォーズ エピソード3』の方が圧倒的に人気は上。

そのうえ、私の事前知識では、多分この『宇宙戦争』はあまり大したことはないだろうという先入観があったため、その鑑賞は先送りとなっていた。しかし、今日8月6日の土曜日は、他の作品のチケットとのかね合いもあり、久しぶりに

「夫婦50割引」を使って2人で……。

ところが、約15分の導入部分が終わり、いよいよ地面が割れて何万年も前からその奥底に隠していた(?)異星人たちの巨大な3本足の戦闘マシン「トライポッド」が登場し、そこから放つ光線で一瞬のうちにすべてを焼き尽くしている姿を観ているうち、「ああ、今日は8月6日、広島への原爆投下の日だった」と気がついた。

そのうえ、映画の中のセリフにも「ヒロシマの……」という言葉が……? こりゃいかん! 広島への原爆投下という現実をこんなSF物語の中でセリフとして使うのは絶対ナンセンス! さらに気に入らない(?)のは、世界中がこのトライポッドと戦っているというニュース(?)がささやかれる中、なぜか「オオサカでは……」というセリフが入っていたこと。

スピルバーグ監督は大の日本びいきだから、あえてこういうセリフを入れたのだろうが、これもナンセンス! 日本人のあなたならそう思って当然、と私は思うのだが……?

シンプルな家族愛の物語?

スティーブン・スピルバーグ監督は、パンフレットの中で「これは大作です。私が関わった中でも最大のスケールを持った映画です。一方でこれは1つの家族に関するとても個人的なストーリーです。(中略)これは親が子供のためにどこまで尽くそうとするかを見せる作品だと思います」と語っているように、この映画の見どころはトム・クルーズ扮する父親レイの家族愛。

そしてこの映画はとにかくシンプル。というよりある日突然異星人が地球を攻めてきたため、父親のレイ(トム・クルーズ)は娘レイチェル(ダコタ・ファニング)と息子ロビー(ジャスティン・チャットウイン)を連れて逃げ回るだけの物語。

そしてたまたま(?) やっと元妻であり、母親のマリー・アン(ミランダ・オットー)のいるボストンまで逃げることができ、「ハイおしまい」というもの。なぜそこで物語を終えることができるのか、つまりなぜ地球人が異星人によって滅ぼされることにならなかったのかは、絶対的の秘密事項。それは映画を観てのお

楽しみ……だが、この手の映画はハッピーエンドで終わるのは想定内の範囲内のはず……。

しかし、家族愛は非情……？

北朝鮮の核兵器の放棄をめぐって、北京で7月以降13日間にわたって続けられてきた異例の「6カ国協議」は、核兵器の平和的利用を認めるか否かをめぐって結局共同文書をまとめることができず、8月7日に「休会」とすることになった。

また、昨日（8月7日）の昼、フィットネスクラブでの20km走の後の休憩中、テレビで観たやしきたかじん司会の『そこまで言って委員会』でも、すべての核兵器の廃棄問題をめぐって熱い議論が展開されていたが、すべての国と、すべての人間が平和に仲良く過ごすことが理想であっても、その実現が難しいことは当然のこと。この映画のテーマとする「家族愛」にしても、それはすべての家族が持つものだから、その間に矛盾、対立がなければ問題ないものの、家族愛を貫くことと他の人間が生きることが矛盾するときは、さてどちらが優先するのか？ そう考えるとそれは難しい。

というよりも、そんな場合は、この映画の中でレイが示すような行動になるのがむしろ当然。しかし、それは別の言い方をすれば、自分の娘や息子への家族愛を貫くために、他の人間を抹殺することになるのでは……？ 何千、何万という流浪の民（？）がぞろぞろと歩いて避難している時、ただ1人レイだけが家族を乗せた車でその先へ進もうとしたらどうなるの……？ そして〇〇の場合や△△の場合は……？ 家族愛は大切だが、それは場合によれば非情なものになることを理解すべきだと私は思うのだが……？

冒頭はありふれた物語……

前述のように、この映画はトム・クルーズ扮するレイの家族愛をテーマとするものだが、どうもこの父親は模範的な夫や父ではなかった（ない）様子。そのせいで（？）妻のマリー・アンとは離婚しているうえ、マリー・アンは既に再婚し、新たな夫がいるという状態。夫婦が離婚した場合、いわゆる「面接交渉権」が認められるケースが多く、妻が引き取っている子供と1カ月に1回程度会うことが

認められるのはよくあるケース。映画の冒頭に登場するのは、そんなどこにでもよくある、離婚した夫婦のありふれた物語……。

逃げ方の合理性は……？

この映画の前半約40%が娘と息子を連れたレイの逃走劇。そして後半の約50%が息子と別れ、娘だけを連れたレイの逃走劇。

そしてさすがスピルバーグ監督。トム・クルーズとダコタ・ファニングの演技の見事さも相まって、迫力ある(?) 逃走劇をスクリーン上で見せている。しかし……？

アメリカ人には当然アメリカ国内の位置関係や距離関係そして方向がわかるかもしれないが、日本人の私には、レイたちが、どこからどこを目指して逃げて行こうとしているのか、そして車ではどれ位、徒歩ではどれ位の時間がかかるのか、そういう前提として知りたい情報をこの映画は全く教えてくれない。

最後にボストンにいる元妻マリー・アンの家に無事たどりつくのは想定範囲内でもいいのだが、上記のことが全くわからないため、レイの逃げ方にどこまで合理性があるのかが全くわからないのは、私のような観客にはかなり不満！

これは別の言い方をすれば、レイがなぜボストンに逃げるのか、またそのためにどの道を選択するのかについて十分考えていないとすれば、それはかなりナンセンスだということ。なぜなら、異星人のトライポッドは、アメリカのみならずヨーロッパやアジアその他地球上の各地を襲っているうえ、アメリカのA地域はやられたが、B地域は大丈夫という保障など何もないもの。

一方から攻められた時、劣勢側が他方へ逃げていくのは当然合理性があるが、この映画では、レイはどういう根拠でどこへ逃走しようとしているのか、またそれに合理性があるのかどうか私には大いに疑問だ。

ハドソン川騒動は……？

この映画の1つのハイライトは、ハドソン川を大きなフェリーで渡るために数多くの「アメリカ難民」(2005年の今はこんな言葉は存在しないが、将来的に「米中戦争」が勃発した際には(?))、ホントにこの言葉が生まれる可能性があ

る)がフェリーに乗り込もうとするシーン。レイも必死でこのフェリーに乗り込むことに成功するが、乗り込んだ直後、川底から登場してきた(?)トライポッドたちによってたちまちフェリーは転覆させられ、全員川の中へ放り出されるのだから、フェリーに乗った方が安全なのか、それとも残って隠れていた方が安全なのかの判断は微妙なはず……?

7月9日(土)に見た『人間の条件』の第5部、第6部は、梶上等兵の愛妻美千子を求めての逃走劇だったが、なぜ美千子が住んでいる南満を目指したのかは容易に理解できるもの。しかし、この映画におけるレイの逃げ方の合理性は……?

「さすが名子役！」と言いたいが……?

一貫してレイと行動を共にするのは娘のレイチェルだが、このレイチェルを演じるダコタ・ファニングは「さすが名子役！」という演技を見せている。

しかし、映画全編がコワイ「化け物」からの逃走劇だから、美しいダコタ・ファニングもその美貌を観客に見せるシーンは全くなく、恐怖にひきつった顔や凍りついた表情、そして恐怖のあまり平常心を失って、わめいたり叫んだりというシーンの連続……。

主役のトム・クルーズも苛酷な撮影だったはずだが、まだ小さい女の子のダコタ・ファニングにとっては、その苛酷さはさらに上をいくものだっただろう。したがって、彼女の名演技は十分に褒められるべきだが、あまり魅力のある役柄とは言えない……?

反抗期の息子はかなりバカ……?

離婚した父親のことを子供たちがどう考えているのかは一般的に難しい問題だし、子供たちが反抗的になるのはよくあるケース……? レイの子供たちの場合、下の娘のレイチェルはまだ幼いからそれほど反抗的ではないが、上の息子のロビーは既にハイスクールの生徒くらいだから、当然父親に対して反抗的……?

それはそれでいいのだが、イザ異星人から攻撃を受けて逃走劇が始まると、このロビーはやみくもに「ボクは戦う!」とワケのわからん主張をくり返して父親

を困らせるばかり。そして遂に軍隊が異星人たちと戦っている現場では、それを実行に移すことに……。これを見ていて私は思わず、「お前はバカか！」と叫びたくなった。

なぜなら、何の武器も持たずまた何の訓練も受けてないハイスクールの生徒がプロの軍隊とともにどうやって戦うというのか……。いくら説得してもレイの言うことを聞き入れず、単独行動をとるロビーに対して、見切りをつける選択も、ギリギリの局面でのこと。

でも、こんな「決断」を父親にさせる息子って、かなりバカ……。そして、そんなバカ息子の行方は……？

なぜか思い出した『風と共に去りぬ』……？

この映画にはいくつかの「山場」があるが、その1つがレイとレイチェルが地下に1人隠れているオグルビー（ティム・ロビンス）に助けてもらった後、その地下の中で展開される人間と異星人との「戦い」。

前述のように、パンフレットにもこの映画のストーリーは何も書かれておらず、秘密主義が貫かれているが、このオグルビーの姿を見て私がなぜか思い出したのは、ハリウッド映画最高の名作である『風と共に去りぬ』に登場するスカーレット・オハラの子の姿。

それも、やっと故郷のタラに帰って来た娘と再会できた父親の家に、北軍の兵士がやって来た時、無謀にも1人馬に乗ってこれを追いかけていき、落馬してしまったあのシーン。なぜそんなシーンとあの父親を思い出したのか、自分でよく考えてみると、それはアメリカ人あるいはアングロサクソン民族のファイティングスピリット。つまり、戦勝国となった北軍の兵士であろうが、今やアメリカ各地を蹂躪している異星人であろうが、むざむざと引き下がらないぞというアメリカ人のスタンス……？

何となく似ていた2人の(?)風貌にも一因があるのかもしれないが……。もっともそんなことを思い出したのは私だけ……？

2005(平成17)年8月8日記